



埼玉県立大学

研究開発センター年報 Vol.9

【 2024年度 活動実績報告書 】



2024年度 埼玉県立大学研究開発センター活動実績報告書

Saitama Prefectural University Annual Report of the Research and Development Center

目 次

埼玉県立大学の研究に関する方針	1
研究開発センターの活動	
1. 設置目的	3
2. 組織	3
3. 活動実績＜総括＞	4
4. センター所属教員の研究活動	5
5. 研究力向上のための支援活動	10
6. 教育・研究・地域連携の一体的推進事業	12
7. 埼玉大学との共同研究	13
8. 産学官連携事業	14
【トピックス】	
プロジェクトの活動	
2024 年度研究開発センタープロジェクト	16
シンポジウム	
研究開発センターシンポジウム 2024	19

埼玉県立大学の研究に関する方針

埼玉県立大学では、陶冶・進取・創発を基本理念とし、保健・医療・福祉に関する教育研究の中核となって地域社会に貢献することを使命としています。この使命の達成に向け、研究に関する方針を次のとおり定めます。

1. 新たな保健・医療・福祉ニーズへの的確な対応など、地域の諸課題や時代の先端を見据えた実用的かつ実践的な研究に積極的に取り組み、現場の課題を多面的な視点でとらえ、解決策を探究・提案します。
2. 各教員が各々の専門分野における研究（基礎・応用研究など）に積極的に取り組むとともに、文部科学省科学研究費助成金の採択、他機関との連携を視野に入れながら大型研究費の獲得を目指します。
3. 産業界、他大学、行政機関等との連携を充実・強化し共同事業・共同研究を推進します。
4. あらゆる機会を活用して、研究成果を広く国内外に公表します。また研究成果は、学内教員や学生などに公開して共有化を進めることで、学部、大学院の教育研究活動に反映させます。
5. 行政機関や県民の抱える課題解決のための研究を推進するために弾力的な研究実施体制、また、研究者の能力向上に向けた研究支援体制の整備を図ります。

本報告書内の著作物を利用する際は、埼玉県立大学の許可を得ること。

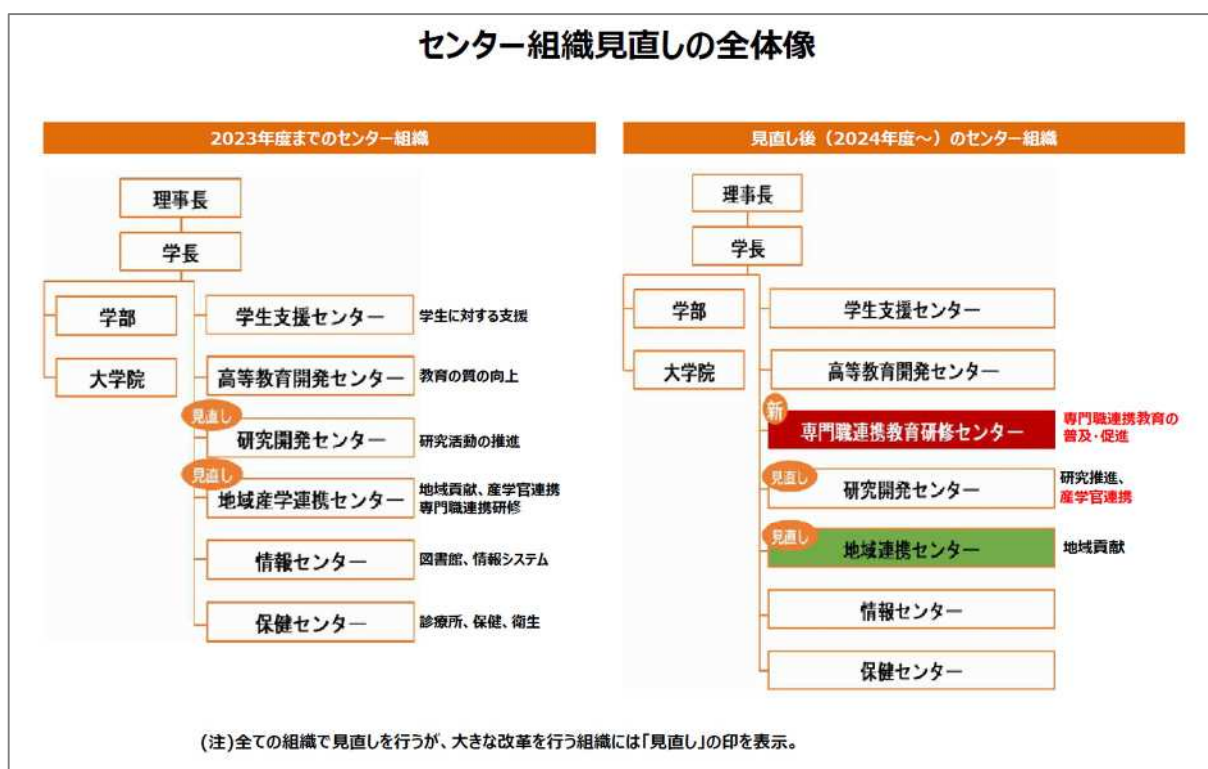
研究開発センターの活動

1. 設置目的

本センターは、我が国の保健医療福祉分野の課題に対して、学際的な観点から地域に根差した研究開発を促進する研究拠点として活動するとともに、広く社会に貢献することを目指す。

2. 組織

保健医療福祉に関する教育・研究の中核となって地域社会に貢献するという本学の使命をより効果的・効率的に発揮するため、2024年4月からセンター組織を見直した。本センターにおいては、研究活動をより一層推進するとともに、企業等と連携しつつ地域に根差した研究活動を行う拠点として機能するため、産学官連携業務を地域連携センターから本センターに移管し、共同研究や受託研究等を強化する。また、本センター業務としていた地域包括ケア等の支援業務を地域連携センターに移管した。



3. 活動実績＜総括＞

1) プロジェクト研究

埼玉県地域包括ケアシステムの発展・深化及び地域共生社会実現に寄与する地域の諸課題の解決や時代の先端を見据えた実用的・実践的な取り組みとして、継続2件、新規2件の合計4件を実施した。

2) 研究開発センターシンポジウム 2024

開学25周年を記念して「地域と共に生きる大学」をテーマに、本学キャンパスにおいて4年ぶりに対面で開催した。地域包括ケアのさらなる発展を目指した研究活動の紹介や市民体験講座に、近隣住民、保健・医療・福祉関係者等76人が参加。また、後日オンデマンドにて動画を配信し、本学の意義を広く周知する機会とした。

3) 研究力向上のための支援活動

研究力向上に向けた支援活動として、主に以下の活動を実施している。

- ① URA 機能の整備
- ② 文部科学省科学研究費の獲得支援
- ③ 研究支援ゼミナール実施
- ④ 研究推進セミナー開催
- ⑤ 大学間共同研究の支援
- ⑥ 大学内研究費の管理
- ⑦ 研究関連事業の募集や採択、研究進捗状況の管理

4) 一体的推進事業

教育・研究・地域連携が一体となった仕組みづくりを目指す事業を学内で公募・助成し、2件の新規事業を実施した。

5) 埼玉大学との共同研究

埼玉大学との共同研究として、2022年3月25日締結の「包括連携に関する協定」に基づき、5件の研究課題に取り組んだ。

6) 産学官連携強化に向けた活動

- ① 本学の研究成果を地域社会に還元するため、産業界のニーズとマッチングさせる支援を行い、共同研究21件、受託研究9件に着手、特許2件を共同出願済み。
- ② 産業界・行政機関・大学等と連携するため、本学の研究シーズの広報活動を行った。

4. センター所属教員の研究活動

◆ 競争的資金等の研究

教授 濱口 豊太			
2022 ～2024 年度	文部科学省科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)基盤研究(C)(一般)	研究代表者	ニューラルフィードバックによる脳腸相関異常を制御する装置開発とその練習効果の検証(22K11340)
2024 ～2026 年度	文部科学省科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)基盤研究(C)(一般)	研究分担者	脳卒中片麻痺を回復させるための経頭蓋磁気刺激後に実施される作業療法計画の最適化(24K14384)
2024 ～2026 年度	文部科学省科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)基盤研究(C)(一般)	研究分担者	画像認識による手指運動麻痺に対する反復運動再現性の評価アプリケーションの開発(24K12380)
2024 ～2026 年度	文部科学省科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)基盤研究(C)(一般)	研究分担者	IBS 用 eHealth システムでの学習が食改善を介して症状軽減に及ぼす効果(23K02924)
2020 ～2024 年度	文部科学省科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)基盤研究(C)(一般)	研究分担者	最適運動軌道と脳活動：目標の明示化による練習効果(20K11234)
2021 ～2024 年度	文部科学省科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)基盤研究(C)(一般)	研究分担者	手指運動画像から筋緊張と麻痺の重症度を推定するアプリケーションの開発(21K11220)
2019 ～2024 年度	文部科学省科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)基盤研究(C)	研究代表者	消化管知覚過敏を軽減させるニューラルフィードバック練習装置の開発(19K11368)

教授 小林 憲生			
2019 ～2024 年度	文部科学省科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)基盤研究(C)	研究代表者	防潮堤建設が及ぼす海浜性昆虫の種構成及び資源利用の変化(21K06309)

教授 飯岡 由紀子			
2019 ～2024 年度	文部科学省科学研究費助成事業(科学研究費補助金) 基盤研究(B)	研究代表者	チームの納得を促進するための看護師のコーディネート力向上プログラム開発と評価 (19H03934)
2020 ～2024 年度	文部科学省科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金) 基盤研究(C)	研究分担者	AYA 世代婦人科がん体験者における女性性の危機と再適応を促す因果モデルの検証 (20K03464)

教授 吉田 俊之			
2024 年度	厚生労働省老人保健事業推進費補助金	研究代表者	地域包括ケア「見える化」システムを活用した地域包括ケアシステムの構築状況の把握と分析に係る調査研究事業
2024 ～2026 年度	厚生労働省科学研究費補助金 (障害者政策総合研究事業)	研究分担者	障害者自立支援機器開発に携わる医療・福祉・工学分野の人材育成モデルの普及促進に資する研究

特任助教 南 拓磨			
2021 ～2024 年度	文部科学省科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金) 若手研究	研究代表者	非婚と独居高齢者に関する包括的な研究 (21K13418)
2024 年度	厚生労働省科学研究費補助金 政策科学総合研究事業 (統計情報総合研究事業)	研究分担者	介護サービス施設・事業所調査の行政記録情報による代替可能性の検証のための調査研究

特任助教 久保田 圭祐			
2024 ～2026 年度	文部科学省科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金) 若手研究	研究代表者	軽度変形性膝関節症者が呈する歩行時の身体重心移動変化に関与する筋同時収縮の解明(24K20501)
2024 ～2026 年度	文部科学省科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金) 基盤研究(B)	研究分担者	身体運動制御・身体運動学習の協調関係ならびに神経基盤の包括的理解とその応用(24K02840)
2022 ～2024 年度	文部科学省科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金) 研究活動スタート支援	研究代表者	軽度変形性膝関節症者における脚力発揮パターンに基づく筋同時収縮メカニズムの解明(22K21244)

◆ 受託研究

教授 吉田 俊之

- ・遠隔見守りシステム導入に伴う看護業務への影響調査
- ・福岡県地域包括ケアシステムの深化・推進に向けた市町村支援業務

◆ 自治体/その他

教授 濱口 豊太

- ・東北大学大学院医学系研究科心療内科学分野 非常勤講師
- ・全国リハビリテーション学校協会 理事
- ・日本作業療法研究学会 会長
- ・日本行動医学会 評議員
- ・埼玉県蕨市「蕨市高齢者福祉計画等策定懇談会」会長
- ・埼玉県蕨市「蕨市介護保険運営協議会」会長
- ・埼玉県理容美容専門学校 評議員

教授 小林 憲生

- ・埼玉大学 遺伝子組換え実験安全委員
- ・草加市 環境審議会委員
- ・日本甲虫学会 英文誌編集委員

教授 吉田 俊之

- ・帝京科学大学医療科学部医療福祉学科 非常勤講師
- ・東京家政大学人文学部教育福祉学科 非常勤講師
- ・一般社団法人日本生活支援工学会 理事
- ・一般社団法人日本生活支援工学会 支援機器人材育成に関する検討委員会 委員長
- ・厚生労働省令和6年度社会福祉推進事業「社会福祉連携推進法人制度の活用等の促進等に関する調査研究事業（受託事業者 PwCコンサルティング合同会社）」事業検討委員会 委員
- ・厚生労働省事業「介護現場の働きやすい職場環境づくりに向けた経営の協働化・大規模化に関する調査研究（受託事業者 PwCコンサルティング合同会社）」事業検討委員会 委員

◆ 論文ほか

教授 濱口 豊太

（論文）

1. Kengo Usuki, Hiroaki Ueda, Toshiya Yamaguchi, Takako Suzuki, Toyohiro Hamaguchi. Action observation intervention using three-dimensional movies improves the usability of hands with distal radius fractures in daily life-A nonrandomized controlled trial in women. PLOS ONE 19(10) e0294301 2024年
2. Daigo Sakamoto, Toyohiro Hamaguchi, Naohiko Kanemura, Takashi Yasojima, Keisuke Kubota,

Ryota Suwabe, Yasuhide Nakayama, Masahiro Abo. Feature analysis of joint motion in paralyzed and non-paralyzed upper limbs while reaching the occiput: A cross-sectional study in patients with mild hemiplegia. PLOS ONE 19(5) e0295101-e0295101 2024年

3. Ryota Suwabe, Takeshi Saito, Toyohiro Hamaguchi. Verification of Criterion-Related Validity for Developing a Markerless Hand Tracking Device. Biomimetics 9(7) 1-14 2024年
4. Kohei Koizumi, Kumiko Sasao, Yoshihiro Senju, Toyohiro Hamaguchi. Power-Assisted Scissors Reduce Adductor Pollicis Muscle Fatigue: A Comparative Study in Female College Students. Applied Sciences 14(23) 11375 2024年
5. Yuji Koike, Akihisa Okino, Yasuhiro Takanami, Toyohiro Hamaguchi. Comparisons of Learning Effectiveness of Therapeutic Motion Techniques: Practicing with an Educational Hemiplegic Robot Arm versus Practicing with Other Students. Applied Sciences 14(18) 8498 2024年
6. Masahiro Abo, Toyohiro Hamaguchi. Effectiveness of a Dual-Task Intervention Involving Exercise and Vocalized Cognitive Tasks. Journal of clinical medicine 13(10) 2024年
7. Takuya Hada, Toyohiro Hamaguchi, Masahiro Abo. Impact of Shaking Exercise on Functional Recovery in Patients with Chronic Post-Stroke Upper Limb Impairment: A Multicenter, Open-Label, Quasi-Randomized Controlled Trial. Applied Sciences 14(14) 1-17 2024年
8. Akihito Kubota, Toyohiro Hamaguchi. Seasonal changes in daily steps of community-dwelling older individuals with and without lifestyle-related diseases: a retrospective cohort study. Journal of Physical Therapy Science 36(5) 252-258 2024年
9. Daigo Sakamoto, Toyohiro Hamaguchi, Yasuhide Nakayama, Takuya Hada, Masahiro Abo. Upper-Limb Functional Recovery in Chronic Stroke Patients after COVID-19-Interrupted Rehabilitation: An Observational Study. Journal of Clinical Medicine 2024年
10. Takaya Abe, Keisuke Kubota, Takahito Nakamura, Yoshinori Kitabatake, Hiroo Furusawa, Toyohiro Hamaguchi, Naohiko Kanemura, Yayoi Amakusa. Changes in caregiving risk and motor function among older adults participating in community gatherings in Koshigaya city. The Journal of Physical Therapy Science 36 117-122 2024年
11. 齋藤剛史, 濱口豊太. 脳卒中後麻痺した手指の評価革新. メディカル・サイエンス・ダイレクト 50(13) 692-693 2024年
12. 小泉浩平, 濱口豊太. がん患者の前向きな生活を支援する心理・運動介入方略. メディカル・サイエンス・ダイジェスト 50(6) 332-333 2024年

(著書)

1. 濱口豊太 (担当:編著者) 基礎作業学 第4版 医学書院 2024年12月 (ISBN: 9784260057486)

教授 吉田 俊之

(専門誌)

1. 吉田俊之. 介護現場の生産性向上の取組とは. カイゴのチカラ, No.131, 2024, 6-12.

特任助教 南 拓磨

(論文)

1. Suguru Shimokihara, Takayuki Tabira, Michio Maruta, Gwanghee Han, Akira Sagari, Naoki Iso, Takuhiro Okabe, Takuma Minami, Masahiro Kawagoe, Does Dialysis Therapy Cause Cognitive Impairment in Older Adults? A Propensity Score Matching Retrospective Study From a Japanese Long-Term Care Insurance Certification Survey. *Asia-Pacific journal of public health*. 2024

特任助教 久保田 圭祐

(論文)

1. Daigo Sakaoto, Toyohiro Hamaguchi, Naohiko Kanemura, Takashi Yasojima, Keisuke Kubota, Ryota Suwabe, Yasuhide Nakayama, Masahiro Abo. Feature analysis of joint motion in paralyzed and non-paralyzed upper limbs while reaching the occiput: A cross-sectional study in patients with mild hemiplegia. *PLOS one*. 19(5), 2024
2. Ken Takiyama, Keisuke Kubota, Hikaru Yokoyama, Naohiko Kanemura. Speed-dependent modulations of muscle modules in the gait of people with radiographical and asymptomatic knee osteoarthritis and elderly controls: case-control pilot study. *J biomech*. 171, 2024
3. Tatsuya Endo, Naohiko Kanemura, Toshikazu Ito, Keita Sato, Takaya Miura, Katsuya Onitsuka, Taku Miyazawa, Keisuke Kubota, Masumi Iwabuchi, Osamu Shirado. Effect of Residual Pain After Posterior Fusion Surgery for Lumbar Degenerative Disorders of Health-Related Quality of Life: A Two-Year Follow-up Using Patient-Reported Outcome Measures. *Cureus*. 16(6), 2024
4. Riku Kawabata, Moeka Yokoyama, Yuka Matsumoto, Keisuke Kubota, Sachiko Kosuge, Yasuyo Sunaga, Naohiko Kanemura. Lower limb biomechanics and control of center of mass during turning phases in daily gait. *Journal of Electromyography and Kinesiology*. 80, 2024

5. 研究力向上のための支援活動

研究力向上に向けた支援活動として、主に以下の活動を実施している。

- ・URA機能の整備
 - 外部研究費獲得支援のためのコーディネータ委嘱及び申請支援（外部資金獲得支援部門）
 - 大型研究遂行支援のためのコーディネータの配置（大型研究遂行支援部門）
- ・文部科学省科学研究費獲得支援
 - 外部講師による科学研究費獲得支援の動画公開
 - 科学研究費助成事業公募の学内説明動画公開
 - 過去に採択された研究計画調書の閲覧制度開始
 - 科学研究費申請関連の書籍の閲覧制度
- ・教員や大学院生のための研究活動支援としての研究支援ゼミナール開催
- ・教職員や大学院生などを対象とした研修会としての研究推進セミナー開催
- ・大学間共同研究の支援マッチングや助成制度の整備
- ・奨励研究費の適切な配分
- ・研究関連事業の募集や採択、研究進捗状況の管理

◆ URA 機能の整備

研究開発センターでは、研究者の外部資金獲得や大型研究遂行を支援するために URA（University Research Administrator）を整備し、研究者の研究活動を支援している。

1) 外部資金獲得支援部門

外部資金獲得支援部門では、プレアワード業務に係るコーディネータを委嘱し、URA プレアワード説明会を開催。科学研究費を始めとする外部資金の申請に関する相談や申請書の添削等を行った。

（利用人数：延べ 21 名、相談 23 件、添削 49 件）

＜URA プレアワード業務による支援内容＞

- ・科学研究費や大学間共同研究、大型の民間助成金等に関する相談対応、助言
- ・上記外部資金等に関する申請資料作成支援
- ・その他、本学の研究開発に関する助言

URA プレアワード説明会の開催

日 時 2024 年 4 月 15 日（月）14：40～16：10

開催方法 Zoom®によるオンライン開催及びオンデマンド配信

対 象 者 本学教員、本学大学院生

講 師 URA プレアワード業務コーディネータ、飯岡 由紀子 教授、久保田 圭祐 特任助教

2) 大型研究遂行支援部門

大型研究遂行支援部門では、ポストアワード業務に係るコーディネータを配置し、データ分析、各種調整、資料作成等、教員が獲得した大型研究の遂行支援を行った。

◆ 科学研究費獲得支援

外部資金獲得支援部門の活動の一環として、外部講師による科学研究費獲得セミナーの動画を公開した。また、科学研究費助成事業公募の学内説明動画の公開や、過去に採択された研究計画調書の閲覧制度、科学研究費申請関連の書籍の閲覧制度などを実施した。

科学研究費獲得セミナー

テ ー マ 科研費申請の最新動向 - 採択を掴むためのポイント解説

公 開 日 2024 年 7 月 23 日（火）

開催方法 オンデマンド配信

対 象 者 本学教員、本学大学院生

講 師 ロバスト・ジャパン株式会社 代表取締役 中安 豪 様

◆ 研究支援ゼミナール

研究活動において、論文投稿は最後の高いハードルとなることが多い。教育活動などにより多忙な中、研究成果をまとめて論文投稿するためには準備が重要となる。そこで、研究データがあるが、学会誌の論文投稿までに至っていない本学教員などを対象として、学会誌への投稿準備に取り組む個別相談を開催した。

テ ー マ 学会誌への論文投稿に関する個別相談

日 時 2024 年 10 月 29 日（火）～2024 年 12 月 3 日（火） 毎週火曜日 18：00～19：30

開催方法 Zoom®によるオンライン面談

対 象 者 本学教員、本学大学院生、本学研究員

講 師 研究開発センター 飯岡 由紀子 教授

◆ 研究推進セミナー

統計分析はデータに基づいた研究の信頼性を確保する上で不可欠な要素である。本セミナーでは、研究者が統計学の基礎を理解し、研究の質を向上させるための知識を習得することを目的としオンライン形式で統計の基本概念やデータ解析の手法について解説、研究活動に役立つ実践的な知識を提供した。

テ ー マ 研究者のための統計学入門

日 時 2025年3月18日（火）13：00～14：00

開催方法 Zoom®によるオンライン開催及びオンデマンド配信

対 象 者 本学教職員、本学大学院生

講 師 千代 浩之 氏（東京大学大学院情報理工学系研究科コンピュータサイエンス専攻特任講師、慶応大学大学院情報理工学系研究科情報理工学系客員講師などを歴任。慶応義塾大学理工学部卒業）

6. 教育・研究・地域連携の一体的推進事業

以下の3点を目標とした「教育・研究・地域連携が一体となった仕組みづくり」を目指す事業を学内で公募・助成し、実施している。こうした事業を通じて、教員と学生がともに取り組む教育活動・地域連携活動を進めている。

「教育・研究・地域連携が一体となった仕組みづくり」の目標

- 1) 教員と学生がともに地域に入り込んだ教育活動・研究活動プロセス自体(対象・内容・成果・実施のための行動等)がその地域における地域連携活動となることができる。
- 2) 学生も教員とともに研究活動に主体的または補助的に携わることで、その研究活動が地域社会への貢献に直結しているという意識を学生自ら育むことができる。
- 3) 学生と教員が一緒に取り組む地域連携の活動地域をアクティブラーニング(課題発見・整理・対策案等の学習・研究)の場とすることができる。

◆ 2024 年度の実績

研究代表者	研究課題名
作業療法学科 准教授 上原 栄一郎	埼玉県立大学におけるアントレプレナーシップ教育の醸成に向けて～保健医療福祉におけるアントレプレナーシップ教育の教育効果～
理学療法学科 准教授 村田 健児	地域スポーツ活動の育成年代における障害予防検診の普及プロジェクト

7. 埼玉大学との共同研究

埼玉大学と本学は、2022年3月25日に締結した「包括連携に関する協定」を踏まえ、同日付で「包括連携協定に基づく共同研究に関する覚書」を取り交わした。本覚書に基づき、大学間の共同研究を通じて、学術研究の発展及び社会貢献等の推進に資することを目指し、共同研究を実施している。

◆ 2024 年度の実績

2024 年度の共同研究の募集に当たり、学内研究者を対象に埼玉大学との合同説明会を実施した。また、共同研究を推進するために、研究者間のマッチング支援や研究支援助成を行い、5 件の課題に取り組んだ。

共同研究 1

研究課題	運動による軟骨変性予防メカニズム解明に向けた細胞機能の検証 -細胞膜流動性の変化に着眼して-
本学研究者	理学療法学科 准教授 村田 健児
埼玉大学研究者	理工学研究科 准教授 乙須 拓洋

共同研究 2

研究課題	保育職を対象としたリカレント教育の内容及び方法に関する実践的検討
本学研究者	社会福祉こども学科 准教授 森田 満理子
埼玉大学研究者	教育学部附属こどもの育ち応援センター 副センター長 小谷 宜路

共同研究 3

研究課題	地域在住高齢者の着衣嗜好の違いによる、歩数・生体情報・主観的心理への効果
本学研究者	理学療法学科 准教授 久保田 章仁
埼玉大学研究者	理工学研究科 助教 大澤 優輔

共同研究 4

研究課題	太陽系における生命起源物質進化の検証と地球外試料を活用した学習教材の開発
本学研究者	共通教育科 准教授 小松 睦美
埼玉大学研究者	自然科学講座理科分野 教授 岡本 和明

共同研究 5

研究課題	カスタマイズ可能な個人用補助器具を製作するための 3D プリンティングに関する研究
本学研究者	作業療法学科 准教授 小池 祐士
埼玉大学研究者	理工学研究科 准教授 PUNPONGSANON PARINYA

8. 産学官連携事業

本センターでは、2024 年度から産学官連携事業として主に以下の活動を実施している。

- ・ 本学と企業等の研究者が共同で研究に取り組む共同研究
- ・ 企業等から依頼された特定のテーマについて本学の教員が研究する受託研究
- ・ 産学連携イベントへの参加

◆ 共同研究 計 21 件(新規契約 10 件、継続 11 件) ※新規のみ掲載

担当教員	契約名称
社会福祉子ども学科 准教授 小川 孔美	個人のみならず地域・社会のウェルビーイング向上を目指したシニアのための持続可能なデジタル利用支援システムの開発
理学療法学科 教授 田口 孝行	(研究テーマ名称非開示)
看護学科 教授 善生 まり子	看護チーム活動を促進するための AI ロボット応用に関する研究
健康開発学科 助教 芝原 花奈子	成人を対象とした選好と口腔保健状態との関連の検討
作業療法学科 准教授 小池 祐士	3D プリンタを活用したオーダーメイドな自助具による地域支援
理学療法学科 准教授 国分 貴徳	(研究テーマ名称非開示)
理学療法学科 助教 清水 新悟	(研究テーマ名称非開示)
理学療法学科 准教授 村田 健児	変形性膝関節症患者に対する特許取得インソール導入効果に関する縦断研究
作業療法学科 准教授 小池 祐士	障害者の更衣動作をサポートする機能性衣服の開発
理学療法学科 准教授 国分 貴徳	科学的データに基づいた医療従事者用被服の開発

◆ 受託研究 計 9 件(新規契約 4 件、継続 5 件) ※新規のみ掲載

担当教員	契約名称
健康開発学科 准教授 津野 陽子	企業における健康経営サービス導入による生産性への影響について
研究開発センター 教授 飯岡 由紀子	看護系大学の女子学生の月経前症状と健康関連習慣・ヘルスリテラシーとの関連
地域連携センター 教授 吉田 俊之	福岡県地域包括ケアシステムの深化・推進に向けた市町村支援業務
地域連携センター 教授 吉田 俊之	遠隔見守りシステム導入に伴う看護業務への影響調査

◆ 産学連携イベントの参加

各種ビジネスマッチングイベントに出展し、研究成果を積極的に発信することで、大学の有する研究シーズの広報に努めた。

1) 大学見本市 2024～イノベーション・ジャパン（主催：科学技術振興機構(JST)）

開催日：2024年8月22日(木)、8月23日(金)

会場：東京ビッグサイト

出展者：作業療法学科 助教 小泉 浩平

出展研究：理容師・美容師の手指障害を予防する動作解析装置

2) 研究シーズマッチング会（主催：公益財団法人埼玉県産業振興公社）

公開日：2024年12月9日(月)～12月25日(水)

公開形式：バイオメカニクス、口腔衛生と健康増進、3D プリンタを活用した事業機会に関する動画のオンデマンド配信

出展者	テーマ
研究開発センター長 教授 濱口 豊太	大学紹介と研究シーズの概要 陶冶・進取・創発
作業療法学科 助教 小泉 浩平	運動障害を予防する動作解析技術～理容師・美容師の手指障害を例に～
研究開発センター 特任助教 久保田 圭祐	製品の強みを証明！解析装置による動作データで差をつける
健康開発学科口腔保健 科学専攻 助教 江良 裕子	口腔内を清潔に保つ歯科材料 ～ナノ多孔質材シリカを活用した虫歯・歯周病予防～
健康開発学科口腔保健 科学専攻 准教授 秋山 恭子	健康長寿を支える口腔健康管理
作業療法学科 准教授 小池 祐士	障害者の社会参加を支えるオーダーメイド自助具 3D プリンタ支援アプリで広げる障害者支援の可能性

3) 彩の国ビジネスアリーナ 2025（主催：埼玉県、公益財団法人埼玉県産業振興公社他）

開催日：＜リアル展示＞2025年1月22日(水)、1月23日(木)

＜オンライン展示＞2025年1月17日(金)～1月31日(金)

会場：さいたまスーパーアリーナ

出展者	テーマ
作業療法学科 助教 小泉 浩平	運動障害を予防する動作解析技術～理容師・美容師の手指障害を例に～
研究開発センター 特任助教 久保田 圭祐	製品の強みを証明！解析装置による動作データで差をつける

プロジェクトの活動

2024年度研究開発センタープロジェクト

埼玉県の地域包括ケアシステムの発展・深化及び地域共生社会実現に寄与する地域の諸課題の解決や時代の先端を見据えた実用的・実践的な取り組みとして、継続 2 件、新規 2 件の合計 4 件を実施した。

1. プロジェクト一覧

区分	研究期間	研究代表者	タイトル
2022-2	2022～2024 年 (3 年間)	健康開発学科健康 行動科学専攻 教授 北畠 義典	越谷市のデータベースを活用した介護予防事業の推進 ―ビッグデータ解析を用いた通いの場の効果検証―
2023-1	2023～2024 年 (2 年間)	看護学科 教授 齋藤 恵子	多文化共生社会における外国にルーツを持つ子育て世代への包括支援推進のための実践研究 ―健やかな妊娠・出産・子育て期を目指した文化に配慮した「やさしい日本語」研修プログラム開発―
2024-1	2024～2026 年 (3 年間)	地域連携センター 教授 吉田 俊之	軽度虚弱な高齢者に有効で普及しやすいリエイブルメント・プログラムの開発及び効果検証研究 ―自立生活の再獲得に向けた高齢者本人の自律的な行動を支援するプログラムの効果検討―
2024-2	2024～2026 年 (3 年間)	理学療法学科 教授 金村 尚彦	変形性膝関節症の病態予測モデルの開発と社会実装に向けた地域支援体制の確立

2. プロジェクトによる研究業績【2024年度分のみ掲載】

◆ プロジェクト2022-2：越谷市のデータベースを活用した介護予防事業の推進 - ビッグデータ解析を用いた通いの場の効果検証 -

1) 公表した又は公表予定の論文

- ① Kubota K et al, Age-specific changes in mental, physical, lifestyle, and motor function in elderly long-term participants at “kayoinoba” (community gathering places) in Koshigaya city. (投稿中)
- ② Nasu T et al, Applicability of community gatherings “Kayoinoba” programs and the potential for predicting changes in physical function over a six-month period in Koshigaya. (投稿中)

2) 公表した又は公表予定の学会発表

いずれも第11回日本地域理学療法学会学術大会 2024. 11. 16-17にて発表済み

- ① 島野優:基本チェックリストと転倒における関連性の検討
- ② 早乙女和幸:越谷市『通いの場』における長期参加者(5年間)の介護予防効果について
- ③ 阿部高家:越谷市「通いの場」への参加による基本チェックリスト総合得点別の効果の差について
- ④ 那須高志:越谷市における「通いの場」へ6ヶ月参加することで、活動範囲は広がるのか
- ⑤ 藤沢麻起子:越谷市「通いの場」の参加者における基本チェックリストと注意機能の関連性について
- ⑥ 岡田健太郎:活動量計を用いた通いの場参加者の日常生活活動量の調査

◆ プロジェクト2023-1：多文化共生社会における外国にルーツを持つ子育て世代への包括支援推進のための実践研究 - 健やかな妊娠・出産・子育て期を目指した文化に配慮した「やさしい日本語」研修プログラム開発 -

1) 公表した又は公表予定の論文

① 投稿予定あり

2) 公表した又は公表予定の学会発表

① 第43回日本看護科学学会一般演題（ポスター）発表

② 日本国際看護学会第8回学術集会一般演題（口演）発表

◆ プロジェクト2024-1：軽度に虚弱な高齢者に有効で普及しやすいリエイブルメント・プログラムの開発及び効果検証研究 ―自立生活の再獲得に向けた高齢者本人の自律的な行動を支援するプログラムの効果検討―

1) 獲得外部資金

① 2024年度老人保健健康増進等事業. 吉田俊之:地域包括ケア「見える化」システムを活用した地域包括ケアシステムの構築状況の把握と分析にかかる調査研究事業

◆ プロジェクト2024-2：変形性膝関節症の病態予測モデルの開発と社会実装に向けた地域支援体制の確立

1) 公表した又は公表予定の学会発表

① 日本運動器理学療法学会での発表を予定

シンポジウム

研究開発センターシンポジウム 2024

1. 趣旨

開学 25 周年に当たる今年は、本学が推進する地域包括ケアシステムの更なる発展のため、1. 本学教員の研究活動成果を中心に講演を行うこと、2. 参加対象者を地域住民に広げることを目的として開催した。プロジェクト研究をはじめ、本学（埼玉県民）の支援を得て実施・蓄積してきた知見を、シンポジウムを通じて改めて広く県民に還元し、本学の意義を理解していただく機会とし、本学の研究活動および地域役割を共有した。

2. 概要

テーマ：埼玉県立大学開学 25 周年記念シンポジウムー地域と共に生きる大学ー

開催日：2025 年 2 月 15 日（土曜日）13：00～15：45

場 所：埼玉県立大学北棟大講義室 346

参加費：無料（オンラインによる事前申込、当日会場申込）

対象者：埼玉県民、保健・医療・福祉分野に携わる方、関心のある方

共 催：埼玉県立大学保健医療福祉科学学会

後 援：埼玉県、日本地域包括ケア学会、越谷市リハビリテーション連絡協議会

その他：本学ホームページにてアーカイブ動画を公開

3. 広報

埼玉県立大学 研究開発センターシンポジウム 2024
開学25周年記念シンポジウム
～地域と共に生きる大学～
2025年2月15日(土) 13:00～15:45 開場 12:30
会場：埼玉県立大学 北棟 大講義室346 車イスカイトリライオン
せんげん白旗よりバス7分
どなたでもご参加いただけます！お気軽にご参加ください

◆ あいさつ：学長 星 文彦 13:05～13:30

第一部	基調講演 「変わり続ける地域課題に立ち向かう取り組みとは ～2040年に向けて～」 理事長 田中 滋	13:30～14:10
第二部	研究紹介 県立大のこれまでの取り組みとこれから① 「適いの態とフレイル予防」 健康開発学科 健康行動科学専攻 教授 北畠 義典 「確やかな妊娠・出産・子育て期を支える 『産科スタッフのためのやさしい日本語』研修プログラム」 看護学科 教授 廣澤 恵子	14:10～14:30
第三部	市民啓蒙講座 「健康を保つためのストレッチ ～実際に体を動かしてみよう～」 共通教育科 准教授 八十島 崇 「長寿の秘訣：咀嚼力の測定とその重要性 ～ガムを噛んでチェックしてみよう～」 健康開発学科 口腔保健科学専攻 准教授 新井 恵	14:45～15:25
第四部	研究紹介 県立大のこれまでの取り組みとこれから② 「年を取っても家で暮らし続けるためには」 地域連携センター 教授 吉田 俊之 「変形性膝関節症の痛みと歩容の特徴」 理学療法学科 教授 金村 尚彦	15:25～15:40
総合討論	コメンテーター：埼玉県福祉部地域包括ケア課 課長 今井 隆元氏 越谷市リハビリテーション連絡協議会 / リハビリテーション/天草病院 岡部 高家氏	

問い合わせ先：研究開発センター ☎ 048-973-4383 (平日 9:00～16:00)
✉ research_c@spu.ac.jp

共催：埼玉県立大学保健医療福祉科学学会
後援：埼玉県、日本地域包括ケア学会、越谷市リハビリテーション連絡協議会

参加費 無料
お申込みはQRコード
からお申し込みします
※2月13日(木)まで

4. プログラム

＜開会の挨拶＞

学長 星 文彦

＜第一部 基調講演＞

「変わり続ける保健医療福祉ニーズに合わせた地域の取組とは-2040 年に向けて-」

理事長 田中 滋

＜第二部 研究紹介 1＞

講演 1：「通いの場とフレイル予防」 健康開発学科 健康行動科学専攻 教授 北畠 義典

講演 2：「健やかな妊娠・出産・子育て期を支える『産科スタッフのためのやさしい日本語』
研修プログラム」 看護学科 教授 齋藤 恵子

＜第三部 市民体験講座＞

講座 1：「健康を保つためのストレッチー実際に体を動かしてみようー」

共通教育科 准教授 八十島 崇

講座 2：「長寿の秘訣：咀嚼力の判定とその重要性ーガムを噛んでチェックしてみようー」

健康開発学科 口腔保健科学専攻 准教授 新井 恵

＜第四部 研究紹介 2＞

講演 3：「年を取っても家で暮らし続けるためには」 地域連携センター 教授 吉田 俊之

講演 4：「変形性膝関節症の痛みと歩容の特徴」 理学療法学科 教授 金村 尚彦

＜総合討論＞

コメンテーター：

埼玉県福祉部地域包括ケア課

課長 今井 隆元氏

越谷市リハビリテーション連絡協議会/リハビリテーション天草病院 阿部 高家氏

＜閉会の挨拶＞

学長 星 文彦

5. 実績

開学 25 周年を記念して「地域と共に生きる大学」をテーマに、本学キャンパスにおいて 4 年ぶりに対面で開催した。地域包括ケアのさらなる発展を目指した研究活動の紹介や市民体験講座に、近隣住民、保健・医療・福祉機関関係者等 76 人が参加した。また、後日オンデマンドにて動画を配信し、本学の意義を広く周知する機会とした。

2024年度 埼玉県立大学研究開発センター活動実績報告書
Saitama Prefectural University Annual Report of the Research and Development Center
2025年3月31日発行

発 行 埼玉県立大学研究開発センター
〒343-8540 埼玉県越谷市三野宮 820
TEL : 048-973-4383
FAX : 048-973-4383
E-mail : Research_c@spu.ac.jp

本文の内容を無断で複写・複製・転載すると、著作権・出版権の侵害となる事がありますのでご注意ください
